

ヴァーバトス王とゼノビア女王

との称号について

小 玉 新 次 郎

一

キャラバン都市パルミユラは、西紀前一世紀頃から中国、インド、安息と地中海、ローマとを結ぶ東西交易の捷徑上の駅として利用されはじめ、二世紀半ばからその繁栄は絶頂期に入り、三世紀後半、息子ヴァーバトス王の名の下に覇権を握ったゼノビア女王の時代に至って、短期間とは云えユーフラテス河からナイル河までの広範な地域を版図としたのである。しかしパルミユラを挟んで、一方ローマ帝国は終始アレクサンドロス帝国の奪回を企て、他方東のバルティア、のちにはササン朝ペルシアはインド・ギリシアの文化を摂取しつつもイラン勢力の代表として、メソポタミア、イラン高原を舞台に統一を図り、両者の間には抗争と平和の時代が繰返された。この中であってパルミユラがバルティア、ササン朝ペルシアのみならず、ローマ帝国に対しても能く自由と独立とを保ったことは刮目に値する。ヴァーバトス王、ゼノビア女王の何れの生涯についても今日充分な記録は遺されていないが、ここではまず夫々に附けられた称号を通じてパルミユラ発展の跡を振返ってみたい。

エジプトにはギリシア語⁽¹⁾で

Basiléōs kai Basiléōs pporatáxwv (女王と王との命により)

ラテン語で

Regina et rex iusserunt (女王と王とが命じた) また、

Bona Fortuna Reginae (女王の幸運)⁽²⁾

と書かれた碑文があり、これらはゼノビアが軍隊を派遣してエジプトを攻略せしめた後のもの、且つローマ皇帝アウレリアヌス(二七〇―二七五年)との協定成立以前、即ち二七〇年の前半期のもと考えられる。⁽⁴⁾ 女王と王とが並立して書かれているのは当時の風習に従ったもので、「女王」と「王」は当時夫々に附けられた唯一とも云える称号であつた。

パルミユラの史料としては、パルミユラからエメッサへのルート上の里程碑に次のギリシア文とパルミユラ文とが見られる。

.....*kai vñep oav* *Σηφίας Σεντιμίαις Ζηνοβίας τῆς καίμαρτάτης βασιλείας ἡμετέρας τοῦ βασιλέως*

(王の母たる最も傑出した女王セプティミア・ゼノビアの幸のために)

パルミユラ文は

(諸王の中でも傑出した王、全オリエントの改良者、諸王の王セプティミウス・オデナトスの子、セプティミウス・

ヴァーバラトス・アテノドロスの幸と勝利のために、且つ傑出した女王、諸王の王の母、アンテリオコス⁽⁴⁾の娘、

ヴァーバラトス王とゼノビア女王との称号について

セプティミア・バツツアバイーゼノビアの幸のために⁽⁵⁾

ここではヴァーバラトスは二つの称号をもっている。即ち父から承け継いだ「諸王の王」と「全オリエントの改良者」とである。前者は単にペルシア王の称号であるが、後者の全オリエントとは特にシリアにおけるローマ勢力を指しているに相違ない。

二七〇年、ゼノビアとアウレリアヌスとの間の協定成立に際してアレキサンドリアで鑄造された貨幣においてヴァーバラトスには次の称号が附けられている。

Ἰ(ούλιος) Ἀ(ύριος) Σ(ερίμιος) Θιαβαλάθου Ἀθρο(δορος) ὑ(πατικός) ἀντ(οκράτωρ) σ(τρατηγός)
Ρα(μάτου)

(ローマ人の將軍、全能の總督たるイウリウス・アウレリウス・セプティミウス・ヴァーバラトス・アテノドーロス) この公式の銘文の中に王 Βασιλεύς なる語が見当らないことは、この語がシリアで発見されたギリシア碑文には見出されるだけに注意すべきである。

アウレリアヌスのアレキサンドリア第三年(二七一年八月二十九日—二七二年八月二十八日)の文書には⁽⁶⁾

Ἰουλίου Ἀύριου Σερτίμιου Θιαβαλάθου Ἀθροδόρου τοῦ λαμπροτάτου Βασιλέως ἀντοκρατόρος στρατηγού
Ροιαίου

(最も傑出した王、全能者、ローマ人の將軍たるイウリウス・アウレリウス・セプティミウス・ヴァーバラトス・アテノドーロスの)

ヴァーバラトス第五年 *κρῆσις* 二十六日(二七一年二月二十三日) 日附の文書には⁽⁷⁾

Τοῦ κυρίου ἡμῶν Σερτίμιου Θιαβαλάθου Ἀθροδόρου τοῦ λαμπροτάτου Βασιλέως ἀντοκρατόρος Ροιαίου
(我々の主、ローマ人の最も傑出した全能の王セプティミウス・ヴァーバラトス・アテノドーロスの)

と書かれ、「王」なる称号と共に「ローマ人」或いは「ローマ人の將軍」という呼称が附けられている。又シリアで発見された同時期の里程碑には、

(Im)perator Athenodo(r)o (イムペラートルたるアテノドローロスに)

またアンティオケイアで鑄造された貨幣にも

V(ir) C(onsularis) R(ex) Im(perator) D(ux) R(omanorum) (執政官「王」イムペラートル、ローマ人の將軍)と書かれている。この外、シリアで発見された碑文にはヴァーバラストスが

του θεαύτου ἀγέρτου ἡμῶν αὐτοκρατορος Οὐαβαλλάδου Ἀθροδόρου

(我々の全能にして不敗の主ヴァーバラストス・アテノドロースの)と呼ばれ、ゼノビアは

Σεντιμία Ζηνοβία σεβαστή μήτηρ τοῦ……

(最も敬虔な母たるセバステ・ゼノビア)

と記されている。⁽⁸⁾

ここではゼノビアに対して「母」という語をつけ、「女王」と呼んでいないことが注意される。

さて、エジプト発見のヴァーバラストス治世第五年と記された貨幣では、ヴァーバラストスは

Αἰρ(αρχάτωρ) Κ(αίσαρ) Οὐαγιαλάος Ἀθρο(σώρος) Σεβ(αστός)

(全能者、カイザルたるヴァーバラストス・アテノドローロス・セバストス)、ゼノビアは

Σεντιμία Ζηνοβία Σεβαστή

(セプティミア・ゼノビア・セバステ)

とあり、ヴァーバラストスがカイザルと自称するこの銘文は、それ自体アウレリアヌスに対する宣戦布告をなすもので

ヴァーバラストス王とゼノビア女王との称号について

ある。

また同時期にアレキサンドリアで、ゼノビアの頭像を刻んだ貨幣が造られたがそれにも同じ称号が記されている。

その後、アンティオケイアで鑄造された貨幣には、ヴァーバラトス単独の像に、

Im(perator) C(aesar) Vhabalathus Aug(ustus)

という銘文があり、更に以前アウレリアヌスとヴァーバラトス両者が同面に刻まれた貨幣像において前者が着けていた王冠をつけている。又同じくゼノビアについても

S(eptimia) Zenobia Aug(usta)

と書かれていて、これらは明らかに独立宣言を意味している(上図参照)。

パルミユラ南方のボストラからアンマンへ至るルート上の里程標⁽¹⁾には、

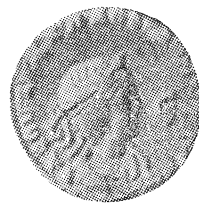
Im(peratori) Caesari L. Julio Aurelio Septimio Vaballaho Athenodoro, Persico Maximo, Arabica Maximo, Adiabenico Maximo, Pio, Felici, Invicto, Au(gusto),

(最も偉大なるペルシア人、最も偉大なるアラビア人、最も偉大なるアデアベン人であり、敬虔なる、幸福なる、不敗なるアウグストスのイムペラートルにしてカイザルたる L・イウリウス・アウレリウス・セプティミウス・ヴァーバラトス・アテノドーロスに)

とあり、またパルミユラの將軍達がゼノビアに献じた彫像には



ゼノビア女王



ヴァーバラトス王

kałmpordkny eioşbñ baalıkaaw

(最も傑出せる敬虔なる女王)

と書き、同義のことをパルミユラ語で

NHYRT' WZDQT' MLKT

と表わしている。

三

パルミユラ王でありゼノビアの夫たるオデナトスは元来ササン朝ベルシヤへの接近を望んでいたが、シャプール一世(二四一—二七二年)の容れるところとならなかったため、ローマと提携し、二五八年には Vir Consularis に任ぜられていた。

しかるに二六〇年シャプール一世がアルメニア、アンティオケイアを従え、ローマ皇帝ヴァレリアヌス(二五三—二六〇年)をエデッサにおいて捕虜とした結果、西アジアではササン朝の覇業の前にローマの威信は全く地に墜ちたのである。ペルシアとローマとの緩衝地帯にあり、東西交易によってのみ存立し得る国、パルミユラの王、オデナトスにとつては起死回生の転機に迫られたのであったが、このローマの怨敵シャプール一世を能くユーフラテス河畔に追いつめて勝利を博してからは自らペルシア王の称号たる「諸王の王」を以て任じ、ローマ元老院からもアウグストス、イムペラートルの称号を贈られて、シリアから小アジアにわたる地域を統治することとなった。オデナトスとローマ皇帝ガリエヌスとの合名の下に貨幣が発行されたのはこの時である。その上、当時ローマは北方からゲルマン族の侵入を受け東方政策を顧る暇がなかったので、パルミユラ人をして好機到来との感を抱かせたに違いない。

ゼノビアが夫オデナトスを暗殺して息子ヴァーバラトスの名の下にパルミユラ統治の全権を握ったのは、かかる基礎の上に立つてのことであつた。ヴァーバラトス即位の二六七年から六九年にかけてパルミユラは漸次その周辺を統治して行つたものと考えられる。

ヴァーバラトスは二七〇年にも「諸王の王」というペルシア王の称号をとり、その後も「最も偉大なるペルシア人」と呼ばれているが、アウレリアヌスのメソポタミア進出に際して、メソポタミアの諸国はそれに参加したのであるから、当時この地方がペルシアの支配下にあつたのではなく、パルミユラ独自の立場で君臨したものと思われる。しかし、ゼノビアがローマに対し独立を決意したのはクロウディウス（二六八―二七〇年）の死の報に接した時といわれているが、その時のパルミユラの西方への勢力は小アジアのアンキュラまで及んでいたに過ぎなかつた。⁽¹⁴⁾ アンキュラより西方のピシディアの諸都市では、ガリエヌスとクロウディウスとの名で貨幣が依然発行されており、又クロウディウスはイソリア人のキリキヤ移住を企図していることによつても明らかである。⁽¹⁵⁾

パルミユラ軍が小アジア西方を征服しはじめたのは二七〇年になつて間もなくのこと、アウレリアヌス昇進の報がもたらされた時は恰もビシニアを攻撃せんとしていたのである。⁽¹⁶⁾ もとよりゼノビアとローマとの決戦が容易なものとは考えなかつたに違いない。アウレリアヌス即位に當つて鑄造された貨幣のヴァーバラトス像に *Imperator Dux Romanorum* の称号がつけられ、裏面にアウレリアヌスの胸像が刻まれているのはローマに對するゼノビアの和策の一つでもある。しかし既にペルシア勢力は恐れるに足らずとし、短時日にしてローマにも独立對等の立場をとつたのは驚くべきことである。

女王の雄図は究局において二七三年アウレリアヌスの攻撃の前に空しく瓦解し、自らは虜れの身となるが、ヴァーバラトスとゼノビアとの称号を通じて、キャラバン都市パルミユラの軒昂たる發展を窺い知るのである。

(註) (1) ヴァーバラトスとゼノビアに関する碑文あるいは貨幣の銘はエジプトではギリシア語、シリアではラテン語、パルミユラではギリシア語とアラム語（パルミユラ地方語）で書かれているが、これらは夫々の地方における公用語である。

- (2) P.É. CIL III Suppl. 65, 83
- (3) P.É. CIL III, 83.
- (4) Février J. G., Essai sur l'Histoire Politique et Economique de Palmyre, Paris, 1931, p.111. ギョムヤントウベリヤヌスとの協定については別稿にゆづる。
- (5) Chabot, J-B., Choix d'inscriptions de Palmyre, Paris, 1922
- (6) Corpus papyrorum Rainer, I, n° IX.
- (7) Wilcken, Uir., Die Titulatur des Waballathus, zfn, XV, 1887, p.331.
- (8) CIL III Suppl. 6728 : 209a.
- (9) CIG, 4503, b.
ここに於て「我々の……主」とはパルミユラ語の MRN-「我々の主人」のことと思われ、オデナトスに捧げられた碑文にもこの語は「我々」前田のヒシブト草紙文書の τοῦ κοίτου ἡμεῶν（我々の主）もこれを意味すると思われる。
- (10) RES, 562.
- (11) Zosimus I, 50, 1-2.
- (12) SHA Trig. Tyr. 26, 7.
- (13) Zosimus, loc. cit.
- (14)

参 考 文 献

- CIG, (Corpus Inscriptiones Graecae)
- CIL, (Corpus Inscriptiones Latinae)
- Chabot, J-B., Choix d'inscriptions de Palmyre, Paris, 1922
- SHA, (Scriptores Historiae Augustae, Loeb Lib.)
- Zosimus, Roman History.

Alföldi, A., *The Crisis of the Empire* (CAH vol. XII.)

Champdor, A., Palmyre. Paris, 1934.

Février, J. G., *Essai sur l'Histoire Politique et Economique de Palmyre*. Paris, 1931.

Starcky, J., Palmyre. Paris, 1952.